

Letter for Members

【コンテンツ】

- 第124回学術大会 295
 - 124回学術大会
 - 平成27年度専門医研修単位認定セミナー
 - 市民フォーラム
- 2015 Biennial Joint Congress of JPS-CPS-KAP
開催報告 301

公益社団法人日本補綴歯科学会 第124回学術大会

メインテーマ

「補綴歯科から発信する医療イノベーション —豊かな食生活のために—」

● 第124回学術大会開催

公益社団法人日本補綴歯科学会第124回学術大会が平成27年5月30日(土)、31日(日)に大川周治教授(明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科補綴学分野)を大会長として大宮ソニックシティにて開催された。大会テーマは、「補綴歯科から発信する医療イノベーション—豊かな食生活のために—」であった。

学術大会における最初の企画として、29日(金)にJournal of Prosthodontic Research (JPR) Science Citation Index 掲載記念セミナーが開催された。「JPRが目指すもの—アジア発の歯科補綴学の推進」と題して、馬場一美先生の進行で、横山敦郎先生および窪木拓男先生から、SCIE 掲載の経緯とその意義、今後の編集方針について、そして今後はアジアの有名補綴専門誌という立場を背負うことになる旨の解説がなされた。大会前日であるにもかかわらず、多くの方々に参加され、本学会の今後益々の発展に期待が膨らんだ。本セミナー終了後、特設連絡通路を使ってパレスホテル大宮(ローズルーム:4階)に移動していただき、懇親会が開催された。藤澤政紀教授(明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科補綴学分野)が司会を務め、大川大会長の挨拶に引き続き、安井利一明海大学学長、矢谷博文理事長、そして住友雅人日本歯科医学会会長よりご挨拶をいただいた。その後、小谷田宏埼玉県歯科医師会副会長のご発声にて乾杯を行った。料理には全員着席によるフランス料理のコースが用意さ

れ、余興にはシンガーソングライターの峠恵子さんによる歌が披露された。テーブルクロスがダークブラウンであったせいか、落ち着いた感じとともに和やかな雰囲気を感じられた。なお、29日(金)に実施された専門医筆記試験には121名の方が受験された。

学術大会第1日目は、第1会場において大川大会長の挨拶による開会式で幕を開けた。第1会場では、まず臨床スキルアップセミナー「口腔機能の客観的評価としての舌圧測定:その意義、開発から展望まで」が開催された。松山美和先生の進行により、小野高裕先生は「咀嚼・嚥下における舌圧の意味」、津賀一弘先生は「高齢者の口腔機能向上への舌圧検査の応用」と題して講演された。

続いて、臨床リレーセッション1「パーシャルデンチャーの設計を再考する」が行われた。小出馨先生の進行により、小出馨先生は「クラスプデンチャーの基本的な設計の在り方」、大川大会長は「パーシャルデンチャーによる咬頭嵌合位と中心咬合位の一致」、大久保力廣先生は「歯に最大限の支持と把持を求める」と題して講演された。第1会場は2,500名(1階席:1,800名、2階席:700名)収容できることから、参加者の分散を回避する目的で2階席は開放しないことになっていたが、約1,200名の方々に参加されたことから、急遽2階席も開放することとなった。日常臨床と密接に関連したテーマであり盛況であった。午後はまず、特別講演1「食べて治す、食べて癒す」が催され



懇親会 開演直前の様子

懇親会余興
シンガーソングライターの峠恵子さんによる歌の披露

東口高志先生による特別講演1(第1会場)



課題口演発表時の様子(第2会場)

た。矢谷博文理事長を座長として、東口高志先生にご講演いただいた。東口先生は診療科横断的、多職種連携 Nutrition Support Team (NST) を本邦で初めて導入された立役者であり、ユーモアを交えながらも口から食べることの重要性を強く訴えられた。歯科界への大いなる支援と感じられる講演であった。続いて、臨床リレーセッション2(専門医研修単位認定セミナー)「要介護高齢者の食を守るために考える：補綴治療を始める前に考えること」が催された。服部佳功先生、池邊一典先生を座長として、大豆生田清志先生(代：矢花渉史先生)は「超高齢社会における『食べる力』に適した食品の供給—スマイルケア食品の普及を目指して—」、菊谷武先生は「運動障害性咀嚼障害を伴う高齢者の食形態の決定」、吉田光由先生は「歯科補綴の効果と限界—食塊形成や食塊移送を助けるのが義歯—」と題して講演された。今後、歯科医師は義歯による補綴歯科治療とともに、食形態を含め、食べる機能を管理する専門職としての役割が求められる時代に突入したと訴えておられた。約1,500名の方々が入場され、活

発な討論が繰り広げられた。

第2会場では、課題口演によって幕が開けた。「バイオロジー」、「臨床効果の評価、トランスレーショナルリサーチ、医療イノベーション」、「口腔機能と全身疾患との関連」の3つの課題について選出された計9名のファイナリストによる発表と指定質問者との質疑応答が行われ、審査が行われた。午後はまず、委員会セミナー(社会連携委員会、医療問題検討委員会)「歯科補綴に関連する医療機器、歯科用材料、補綴装置の安全管理について」が行われた。佐藤博信先生を座長として、和田康志先生は「歯科技工に関する国の施策等について」、末瀬一彦先生は「歯科技工に係わる安全管理について」と題して、トレーサビリティの確保、歯科医療者側の安全管理の重要性について解説がなされた。続いて、シンポジウム1「チェアサイドとベッドサイドをつなぐ睡眠時ブラキシズムの診断と治療」が開催された。本大会の藤澤政紀実行委員長の進行により、山内基雄先生は「閉塞性睡眠時無呼吸症候群の多様性と個別化治療への道」、加藤隆史先生は「睡



ポスター展示（第6会場）



基礎実習改善のための情報交換（第7会場）

眠時ブラキシズムの臨床・研究に睡眠医学は必要か？、馬場一美先生は「SB 臨床診断の現状と展望」と題して講演された。睡眠時ブラキシズムの臨床診断と治療に関する現状と、歯科の分野が今後取り組むべき問題点や方向性について提言がなされた。

第3会場では、午前午後とも一般口演が行われた。第4会場は第2会場のサテライト会場、第5会場は第3会場のサテライト会場となった。

第6会場はポスター展示、第7会場は「基礎実習改善のための情報交換」の場として、各大学で使用されている実習書等の資料展示が行われた。第7会場は休憩ブースも兼ねており、和やかな雰囲気の中で、各大学の実習書の閲覧や発表担当者との質疑が活発に行われていた。また、午後5時から6つのイブニングセッションが、第2, 3, 4, 10, 11, 12会場で行われていた。公募したファシリテータの中から7名を選出し、この7名の方々が提案する6つテーマに関して、新進気鋭の演者を研究業績に基づいて選んでいただき、7名の先生方にはコーディネーターとして進行役を務めていただいた。第2会場では、イブニングセッション1「無歯顎患者における有床義歯補綴－全部床義歯とインプラントオーバーデンチャーとの比較－」（コーディネーター：兒玉直紀先生、発表者：松田謙一先生、金澤学先生）、第3会場では、イブニングセッション2「硬軟組織の難治性疾患に対する病因解明と治療方法開発に向けての取り組み」（コーディネーター：黒嶋伸一郎先生、発表者：熱田生先生、松浦尚志先生、加来賢先生）、第4会場では、イブニングセッション3「閉塞型睡眠時無呼吸症候群治療の現状と今後の展開－ Interdisciplinary treatment approach のなかでの歯科補綴の役割－」（コーディネーター：津田緩子先生、発表者：山内基雄先生、犬飼周佑先生、小川徹先生）、

第10会場ではイブニングセッション4「『再生歯科補綴』の技術確立に向けて－補綴歯科治療に求められる歯・歯槽骨の再生とは－」（コーディネーター：新部邦透先生、発表者：末廣史雄先生、大島正充先生）、第11会場ではイブニングセッション5「歯科金属アレルギーと関連疾患に関する診療ガイドライン策定を目指して」（コーディネーター：秋葉陽介先生、渡邊恵先生、発表者：渡邊恵先生、峯篤史先生、池戸泉美先生）、第12会場ではイブニングセッション6「咬合支持の有無と脳機能研究の展開」（コーディネーター：原哲也先生、発表者：川西克弥先生、大野晃教先生、飯田祥与先生）と題して活発な議論がなされ、いずれの会場も盛況であった。なお、第5会場では市民・県民フォーラム「義歯で健康寿命を伸ばそう－味わうことの大切さ－」が催された。皆木省吾先生の進行で、櫻井薫先生は「健康であるための入れ歯の知識」、神山かおる先生は「より良く味わうために－食品からのアプローチ－」と題して講演された。参加された市民から質問が出るなど、活気に溢れていた。

学術大会第2日目は午前8時から、第2会場の教育講演、第3会場のモーニングセッションで幕を開けた。教育講演「スポーツに対して歯学・歯科補綴学が果たす役割」では、前田芳信先生（次期大会長）を座長として、安井利一先生は「歯科臨床におけるスポーツ歯科医学」、近藤尚知先生は「アスリートの咬合を守るために」と題して講演された。2020年の東京オリンピックへ向けて歯科界全体がアクションを起こし、実行することの重要性を強調された。なお、前日の地震で関東圏の交通機関や、さらに新幹線にも大きい乱れが生じた。講師の安井先生と近藤先生は深夜での大宮入りとなり、多大なるご迷惑をおかけした。本大会に参加されている方も都内に宿泊されている方が多く、

ホテルやご自宅への帰宅には苦慮されたことと推察される。しかしながら、早朝のセッションであるにもかかわらず、多くの方々が入場され盛況であった。2020年に東京オリンピックが開催されることもあって、スポーツ歯科医学への関心の高さが伺われた。

モーニングセッションでは、西村正宏先生を座長として、飛田護邦先生が「再生医療等安全性確保法と歯科医療」と題して、歯科医療における再生医療等安全性確保法の位置付けとともに、各種申請手続きの流れについて解説された。極めてタイムリーな内容であり、再生医療に関する臨床および研究に従事されている方々が熱心に聴講されていた。

第1会場は、午前9時から臨床リレーセッション3「認知症と歯科医療—認知症とはどんな病気か？ 歯科治療はどのように、また、いつ行うべきか？ 認知症に罹患したら歯科にかかるよう勧めるために—」が開催された。窪木拓男先生を座長として、平野浩彦先生は「認知症の口を支える視点」、池田学先生は「認知症患者にみられる食行動異常」と題して講演された。認知症はすでに特別な疾患ではなく、身近な病気になってきている。歯科医師の認知症対応力向上研修（仮称）実施が明文化されており、今後、さらに歯科医師を含めた多職種連携の重要性が高まると指摘されていた。続いて、特別講演2が催された。古谷野潔先生を座長として、「Recent advances in digital dental technology: The future is here」というテーマで、Dr. Baldwin Marchackに口腔内スキャナーの利点・欠点、そして種々のCAD/CAMシステムの最新情報とともに、その選択基準を示していただいた。午後は、専門医研修単位認定セミナー「全部床義歯補綴の統一見解」が開催された。水口俊介先生を座長として、松田謙一先生が「全部床義歯臨床における印象と咬合の歴史的変遷と論点の整理」、鈴木哲也先生が「全部床義歯の床形態に関する統一見解」、市川哲雄先生が「全部床義歯の咬合に関する統一見解」と題して講演された。約1,900名という非常に多くの方々が参加され、質疑も活発に行われ

熱の籠ったセッションとなった。

第2会場では教育講演の後、シンポジウム2「テクノロジーと医療」が開催された。二川浩樹先生、小川匠先生を座長として、寺田信幸先生が「共生ロボットによるヘルスケア」、大竹義人先生が「医用画像における情報融合を用いた低侵襲計測」と題して講演された。午後のシンポジウム3では「幹細胞研究の現状と将来展望」と題して、魚島勝美先生および西村正宏先生の進行で、長澤丘司先生が「造血幹細胞・前駆細胞を維持する骨髄の微小環境（ニッチ）」、玉井克人先生が「骨髄間葉系幹細胞と損傷組織のクロストーク」、秋山謙太郎先生が「間葉系幹細胞機能に関する最新の知見」と題して講演された。同じ時間帯に、第1会場で専門医研修単位認定セミナーが開催されていたにもかかわらず、間葉系幹細胞を応用した先端的研究成果について活発な質疑がなされた。

第3会場ではモーニングセッションの後、午前午後とも一般口演が行われた。第4会場および第5会場は第1日目と同様に、各々第2会場および第3会場のサテライト会場となった。なお、第7会場（702～705）では、1室につき2名ずつ計8名の専門医ケースプレゼンテーションの審査が行われた。

本学術大会の最後のイベントとして、第1会場で課題口演優秀賞受賞者3名、課題口演賞受賞者6名、優秀ポスター賞であるデンツプライ賞受賞者6名、カボデンタル賞受賞者2名の表彰式が執り行われた。口頭発表59題、ポスター発表120題と従来の大会よりやや少なめの演題発表であったが、両日を通して2,600名を超える参加者を迎え、盛会の内に幕を閉じた。本学術大会の準備にご尽力いただいた矢谷博文理事長、窪木拓男学術委員長、学術委員会委員各位、学会関係各位、ならびに後援団体各位に厚く御礼申し上げます。ご参加いただきました皆様にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(明海大・岡本和彦)

●平成27年度専門医研修単位認定セミナー報告

平成27年度専門医研修単位認定セミナーは、平成27年5月30日（土）31日（日）の両日に第124回学術大会に併せて大宮ソニックシティで開催された。30日（土）には、臨床リレーセッション2として「要介護高齢者の食を守るために考える：補綴治療を始める前に考えること」というテーマで3名の演者の講演が行われた。農林水産省食料産業局食品製造卸売課長の矢花渉史氏が「超高齢社会における「食べる力」に

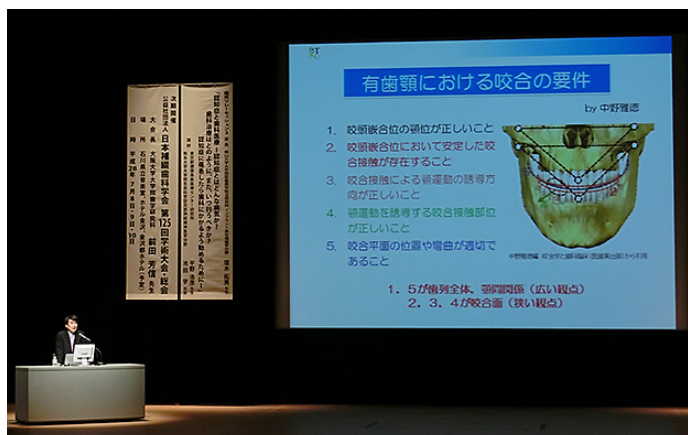
適した食品の供給—スマイルケア食の普及を目指して—」、日歯大の菊谷武先生が「運動障害性咀嚼障害を伴う高齢者の食形態の決定」、広島市立リハビリテーション病院の吉田光由先生が「歯科補綴の効果と限界—食塊形成や食塊移送を助けるのが義歯—」と題して講演された。昨年度、農林水産省は「“新しい介護食品”スマイルケア食の選び方」を提案し、高齢者の低栄養の問題認識等と併せてスマイルケア食の広報と普及に努めているとの報告があった。菊谷先生より運動

障害性咀嚼障害を伴う高齢者の経口摂取時の動画を閲覧し、介護食区分との関連を含めて解説が行われた。その中で従来の粉碎能力を中心とした咀嚼機能評価法では運動障害性咀嚼障害を評価できないので、新たな咀嚼機能判断に基づく食形態の選択が必要であることが示された。吉田先生より義歯による咀嚼機能の改善が食塊形成や食塊移送に効果があることとその限界が提示された。超高齢社会の歯科医師は、多くの高齢者が食べる楽しみを持ち続け、健康な生涯を送るためにも、口腔から安全に必要な量の栄養と水分を摂取できる機能とそのための食形態を管理する専門職として、積極的な関与を国民から求められていることを認知することが出来た。

31日(日)には、前回までの纏めとして「全部床義歯補綴の統一見解」というタイトルで3名の演者の講演が行われた。大阪大の松田謙一先生が「全部床義歯臨床における印象と咬合の歴史の変遷と論点の整理」、医歯大の鈴木哲也先生が「全部床義歯の床形態に関する統一見解」、徳島大の市川哲雄先生が「全部床義歯の咬合に関する統一見解」と題して講演された。始めに松田先生が、バウチャーの無歯顎患者の補綴治療の初

版(1940年)から第13版(2013年)までに、変遷が認められたポイントの抽出を行い、「印象圧」や義歯の“外形”について、また付与すべき“咬合”の論点を提示した。続く鈴木先生は下顎舌側を中心に目標とすべき形態の統一見解を提示し、さらに印象法との関連について解説した。選択的加圧印象について、機能時の義歯の動きを示し、力を一方向に規定できない全部床義歯の場合、その実現は難しいことを解説された。その中で咬座印象の目的は従来考えられていた加圧印象の効果より、印象材の厚みによる咬合採得のエラーの補償の効果が大きいと述べられた。市川先生は臼歯部人工歯の排列位置と咬合様式に焦点を当て、全部床義歯が達成すべき咬合の本質を見極め、統一見解を示した。最後のデスカッションでも活発な議論が行われ、各講師の先生方より示唆溢れるご回答を伺うことが出来た。両セミナーとも専門医更新予定者ならびにこれから専門医を申請しようとする多くの会員の先生方で盛況であった。専門医の臨床において更なるステップアップを目指す内容が多く含まれており、非常に有意義なセミナーであった。

(医歯大・関田俊明)



「全部床義歯補綴の統一見解」市川哲雄先生

●市民フォーラムのご報告

公益社団法人日本補綴歯科学会第124回学術大会の併催企画として、社会連携委員会の企画・運営により、市民・県民フォーラムが平成27年5月30日に大宮ソニックシティビルで開催されました。

「義歯で健康寿命を伸ばそうー味わうことの大切さー」というテーマのもと、座長の皆木省吾先生(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 咬合・有床義歯補綴学分野)による挨拶に始まり、櫻井薫先生(東京歯科大学老年歯科補綴学講座)と神山かおる先生(農業・食品産業技術総合研究機構)のお二人が講師として紹

介されました。櫻井先生の講演は「健康であるための入れ歯の知識」というタイトルで、入れ歯と健康の関係、役割について説明がなされ、入れ歯と機能している歯数、咀嚼機能が寿命に与える影響がいかに大きいかという内容をメッセージなさいました。またデンチャープラークが及ぼす影響や入れ歯、舌の清掃の仕方などを写真で示しながら解りやすく解説なさいました。神山先生の講演は「より良く味わうためにー食品からのアプローチー」というタイトルで、食品研究者の立場から噛むこと、味わうことの大切さについてお話なさいました。美味しさを決める二大因子(テクス

チャーとフレーバー)の重要性、食品加工と美味しさには嘯むことが大切であることということ、介護食品の今後の検討など非常に奥の深い話でした。

これらのメッセージは市民に益するところ大であったと思います。今回の市民フォーラム開催準備のため

に尽力くださった、学術大会主管の明海大学の皆様ならびに関係各位にこの場を借りて心から感謝を申し上げます。

(福歯大・松浦尚志)



講演開始前の参加者の様子

2015 Biennial Joint Congress of JPS-CPS-KAP開催報告

平成 27 年 (2015 年) 4 月 10, 11, 12 日の 3 日間, 矢谷博文 (公益社団法人日本補綴歯科学会理事長, 大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座クラウンブリッジ補綴学分野教授) を大会長として 2015 Biennial Joint Congress of JPS-CPS-KAP が開催された。

Biennial Joint Congress of JPS-CPS-KAP は, Japan Prosthodontic Society が Chinese Prosthodontic Society および Korean Academy of Prosthodontics と国際交流提携を締結し, 2008 年に第 1 回 (名古屋), 2011 年に第 2 回 (上海), 2013 年に第 3 回 (済州) が, 3 か国それぞれの国内学術大会開催時に併催されてきたが, 第 4 回目となる今回は, 初めての試みとして, 箱根小涌園 (神奈川県) において合同国際学術大会を国内の学術大会と併催せずに単独で開催した。

本学術大会は, メインテーマを “Creation, Innovation, and Personalization” として, 歯科補綴学および補綴歯科臨床を代表する 3 か国のトップクラスの講師による 3 つのシンポジウムを中心に, 特別講演, 一般口演 15 演題, ポスター発表 42 演題というこれまでにない規模で開催され, 参加者数は, 日本から 117 名, 中国から 37 名, 韓国から 57 名, ベトナムから 1 名の計 212 名であった。

1 日目は, 大会長である矢谷博文理事長の開会の挨拶

に続き, 中国, 韓国の代表からもご挨拶をいただき, 一般口演が行われた。一般口演は, Oral Session I: Materials 4 演題 (Session Chairperson: Prof. Ikuya Watanabe), Oral Session II: Implant 4 演題 (Session Chairperson: Prof. Ryuji Hosokawa), Oral Session III: Biology 3 演題 (Session Chairperson: Prof. Katsumi Uoshima), Oral Session IV: Digital dentistry 4 演題 (Session Chairperson: Prof. Kazuyoshi Baba) の 4 セッションに分けて開催された。夜には立食形式の Welcome Reception が催され, 3 か国の参加者同士が旧交を温め, 積極的な情報交換が行われた。

2 日目の午前中は, Symposium I “Biologic contribution in the prosthodontic research” からスタートし, JPS の Prof. Takuo Kuboki, CPS の Prof. Cui Huang を座長とし, まず Prof. Hiroshi Egusa (Tohoku University) が “iPS cells: What they are and what they can contribute to prosthodontics” を, 次に, Prof. Yongsheng Zhou (Peking University) が “What can prosthodontics get from basic research? - PKU experience” を, 最後に Prof. Jae-Hoon Lee (Yonsei University) が “Personalized medicine for dental disease” を発表し, 活発な質疑応答が行われた (写真 1)。引き続き, 大会長の Prof. Hirofumi Yatani を



写真 1 Symposium I “Biologic contribution in the prosthodontic research”
左から, Prof. Jae-Hoon Lee (Speaker, Yonsei University), Prof. Hirofumi Yatani (President), Prof. Hiroshi Egusa (Speaker, Tohoku University), Prof. Yongsheng Zhou (Speaker, Peking University), Chairperson の Prof. Takuo Kuboki (JPS) ならびに Prof. Cui Huang (CPS)



写真 2 Special Lecture
Prof. Çetin Sevük (Istanbul University, Turkey)

座長とし、Prof. Çetin Sevük (Istanbul University, Turkey) による Special Lecture “Innovations in single tooth restorations from minimally invasive to implants” が行われた (写真2)。

2日目のお昼には、3か国の補綴学会理事19名による Executive Meeting が、JPS の Prof. Kiyoshi Koyano を議長、Prof. Chikahiro Okubo を書記として開催され、今後の開催方法や、3か国合同補綴歯科学会学術大会の名称についての協議が行われ、“Biennial Joint Congress of CPS-JAP-KAP” を正式名称とすること、次回の “The 5th Biennial Joint Congress of CPS-JAP-KAP” は CPS の主幹で開催されるため、開催地についての希望があれば意見を寄せてほしいことなどが話し合われた。

2日目午後には、Optional Excursion として Hakone & Ashinoko Lake Tour が催された後、夜には全員浴衣を着て、お座敷形式での Gala Dinner が行われ、これまでにない趣向に大いに盛り上がり、国境を越えた楽しい雰囲気の中で有意義な交流が行われた。

3日目は、Symposium II “The cutting edge of prosthodontic practice” からスタートし、CPS の Prof. Yining Wang, KAP の Prof. Jung-Suk Han を座長とし、まず Associate Prof. Osamu Komiyama (Nihon University Matsudo Dental School) が “The importance of brain function and force control in prosthodontic treatment” を、次に Prof. Haiyang Yu (Sichuan University) が “DLD, a digital approach to dental esthetic design” を、最後に Prof. Hyeong-Seob Kim (Kyung Hee University) が “Current

trends about zirconia restorations in Korea” を発表した (写真3)。引き続き、Symposium III “Implant prosthodontics” が JPS の Prof. Kiyoshi Koyano, KAP の Prof. Dong-Hoo Han を座長として開催され、まず Prof. Xinquan Jiang (Shanghai Jiao Tong University) が “Application of structure and chemical cues in biomaterials design to promote osseointegration” を、次に Associate Prof. Yasunori Ayukawa (Kyusyu University) が “The acquisition of secure peri-implant soft tissue sealing” を、最後に Prof. Seong-Joo Heo (Seoul National University) が “Clinical application of biomechanical researches in implant dentistry” を発表した (写真4)。両シンポジウムとも、前日に引き続き、非常に活発な質疑応答が行われた。

閉会式に先立ち、JPS の Prof. Kaoru Sakurai から、Best Oral & Poster Presentation Award の贈呈式が行われた。Best Oral Presentation Award は、Dr. Jian Yang (Peking University), Dr. Yi Zhou (Wuhan University), Dr. Yasuhiko Kawai (Nihon University School of Dentistry at Matsudo), Dr. So-Hyoun Lee (Busan National University) の4名の先生方が受賞された。また、Best Poster Presentation Award は、Dr. Sayumi Inoue (Nihon University School of Dentistry at Matsudo), Dr. Toshihito Takahashi (Osaka University), Dr. Tae-Kyun Kim (Kyungpook National University), Dr. Jungwha Lee (Dankook University of Dentistry), Dr. Xuefen Lin (Shandong University), Dr. Xiangfeng Meng (Nanjing University) の6名の先生方が受賞された。



写真3 Symposium II “The cutting edge of prosthodontic practice”
左から、Associate Prof. Osamu Komiyama (Speaker, Nihon University Matsudo Dental School), Prof. Haiyang Yu (Speaker, Sichuan University), Prof. Hirofumi Yatani (President), Prof. Hyeong-Seob Kim (Speaker, Kyung Hee University), Chairperson of Prof. Yining Wang (CPS) ならびに Prof. Jung-Suk Han (KAP)



写真4 Symposium III “Implant prosthodontics”
左上から、Prof. Xinquan Jiang (Speaker, Shanghai Jiao Tong University), Associate Prof. Yasunori Ayukawa (Speaker, Kyusyu University), Prof. Seong-Joo Heo (Speaker, Seoul National University), Prof. Hirofumi Yatani (President), Chairperson of Prof. Dong-Hoo Han (KAP) ならびに Prof. Kiyoshi Koyano (JPS)

閉会式では、最初に次回開催国を代表して CPS の Prof. Yining Wang によるご挨拶をいただき、JPS の Prof. Misao Kawara による閉会のご挨拶で、3 日間の充実した学術大会の幕が閉じた。

最後に、実行委員会を代表して、本学術大会の開催

にあたりご支援をいただいた企業各社、国際渉外委員会および学術委員会の先生方、東京歯科大学ならびに鶴見大学の協力委員の先生方に深く感謝いたします (写真 5)。

矢谷博文、石垣尚一 (大阪大)



写真 5 大会を終えて。
実行委員会委員および協力委員の先生方

【投稿募集】

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、公益社団法人日本補綴歯科学会事務局 (jpr-edit01@max.odn.ne.jp) まで、メールにてお寄せください。